

## いつもありがとう

稲葉 瑞季

それは、とつせんにやつて来ました。いつも朝ごはんを食べ、わたしを見送ると、母はいそがしく仕事に行きます。わたしが赤ちゃんの時から、あたり前の毎日です。

でも、わたしが学校からもどるころには、家に来てくれるので、あまりさびしく感じることは、ありませんでした。

元気で、時にはこわく、ちよつとふざけた母。何度もダイエットにチャレンジする母がおもしろく思える人です。

さく年の春、その母が病氣だと知らされ、わたしには、病氣の意味が、良くわかりませんでした。一カ月近い入院、手術、そして退院。また、あとからやつて来る半年以上の治りようを見て、その意味がわかりました。

あれから一年。春から、ちりようは始まり今、もつとらしい、副さようとなつています。わたしは、かみの毛のない母を、一休さんとよんでいます。母は「そんなに、えらいよ。」と言ひ、

でも、うれしそうにわらつています。

今日も、明日もあたり前のわが家のリズムは、母の病氣で変わりました。

ごはんは、出ていてとつせんと思ひ、洗たく、そうじはだれが？  
家の中には、やる人がたくさんあります。家族のだけれがやつて

父は、仕事と、母の分の家事をやることになり、今も母のぐあいの悪い時は、食事の用意をしてくれます。母の料理とは味のちがう所や、もりつけもどこかへんですが、父のがんばるすがたを見ると、心の中で「ありがとう。」とつぶやいています。

父と母は、「年をとつて生まれた子どもだから、うんと長生きしなくちゃね。」と良く話します。わたしという時間を一日でも長く、大人になつたわたしを、見ることを楽しみにしてくれています。

母が食事がとれず、イスが空いている時はさびしくなり、何度もねどこに食事を運び、いっしょにごはんを食べました。

わたしには、まだまだ母から、たくさん教わるがあります。当たり前と思つてゐる生活が、空氣のようになつてゐる中では、何がどうちがうのか考えることもないかもしれません。

でも、家族のひとりリズムがかわつた時気づくのだと思います。

今、わたしに出ることは、両親とたくさん会話をしたり、いっしょに助け合うことだと思つてゐます。

母が一日も早く、病氣に勝ち、ふつ々の毎日が送れることをねがつています。

そして、わたしのためにがんばる母に、

「いつも、ありがとう」と。  
わたしは、母のえ顔と手のぬくもりが大好きです。